

＜今日の説教のポイント 創世記3章、ルカ福音書23章34節＞
人はなぜ統一教会に騙されるのか？ それに対する聖書の答は？

1 同じことが起こり続けている — 歴史から学ぶことの大切さ

統一協会やオウム真理教問題に深くかかわられた浅見定雄先生が30年前に話された文章を見ますと（配布）、全く今と同じことが繰り返されていることが分かります。つくづく私たち人間は歴史から学ばないで同じ問題を繰り返し起こしてしまう存在なのだなと思わされます。

2 会見を見て — 救われるための対価に問題あり。

20日の統一教会の会見で一番大きな問題だと思ったのは、高額献金の問いに対して「あれは本来一気に払うものではない」という主旨の答えを返し、決して否定していなかったことです。宗教の救いはお金を対価として手に入れられるものとは全く違うものであり、だからこそ救いなのです（21日の金曜礼拝の「説教のポイント」から）。

3 「聖書は神の言葉である」 — しかし、その理解の仕方が問題。

聖書は神様の御旨を伝えるために、物語・歴史書・詩・預言文学など様々な文学形態が用いられてできた書物です。すなわち、神様は色々な書き手と様々な文学形態を用いて私たちに神様の御旨を伝えようとされ、そのことを覚えて冷静に正しく読み取る作業をする時に聖霊の導きが注がれ、人間の理解を超えた愛と赦しに満ちた神様を捉えることができると初代教会以来の信仰者たちは考え、そうして読み取った聖書の内容を二千年間蓄積してきたのです。それを無視して、霊が下った人から聞くことが大事なのだと思うような書物ではありません。ですから、教理史や教会史を軽視した信仰で行こうとする時、聖書に基づく信仰であっても「人間の宗教」（バルト）になるのです。

4 聖書が示すのは、どんな罪人も見捨てず救いに導く神様の存在！

統一教会（文鮮明）の創世記1～3章の理解の仕方は、教会が蓄積してきたものとは全く離れた荒唐無稽のものです。創世記3章は全ての人間は罪の状態（神の方向を向いて生きていない）にあるけれども、しかしなお神様はその人間を愛し、保護して下さる赦しと愛に満ちたお方であること（3:21、4:15も）を示しているのです。強調すべきは神様の愛であって、それは神様ご自身が差し出して下さったイエス・キリスト以外の対価無しに罪深い私たちを救いに招いて下さる憐み深い神様の存在なのです（ルカによる福音書23章34節にも注目）。